

令和 6 年 5 月 24 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K02608

研究課題名（和文）西洋古典における「光」と「輝き」の表象と色彩表現との相関性に関する研究

研究課題名（英文）Brightness and Colour: Studies on their Interconnection and Representations in the Literature of Antiquity

研究代表者

西塔 由貴子 (Saito, Yukiko)

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・招へい教員

研究者番号：60411948

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ホメロスを中心に西洋古典の作品に著された、物語の景観に溶け込む光輝きの役割の役割を探究し、詩人の創造性および光輝きの多彩な表象性、そして神聖な事象との繋がりを提示し、有用な知的貢献をすることができたと考える。訪問先の研究機関でも充実した調査を実施し、同時に国際的連携を拡大・進展させた。本研究最大の収穫は、当該研究者の学術的立場の確立とともに、立体的に原典を読み解く 'texts as kinetic design' という基本理念を打ち出し、次のステップにつながる方向性を見出したことである。国際的動向を見据えて今後の研究活動を展開させていくための基盤を築き上げ、有意義な研究であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来顧みられることのなかった色彩の上に映える光と輝きの深層を探究し、詩人の采配による景観描写であるという一定の見解を示し、認知科学の知識を取り込むことによって、新たな活路、即ち動きある感覚や感情を踏まえて原典を扱うという発展性のある方向性への前進は、斯界研究に新たな視点を投じた。光と陰影とのシームレスな連関性も重要事項として捉え、「輝いている」ことについて文学的視点から考察し、区別し基準化を促進する傾向に問いを投げかけると同時に、輝く多彩なカラー（個性）の重要性の認識について社会にメッセージを送ったことは、多岐にわたって学術的関心を惹きつけ、学術的にも社会的にも大きな意義があると確信する。

研究成果の概要（英文）：This research project attempts to visualise the Homeric epics, pursuing how light and light-related expressions (e.g., sigaloeis, marmareos, aiolos, etc.) could be perceived as moving around, inside, and outside the Homeric narrative, through colour/light-related epistemological investigation. It presents novel concepts which can broaden our thinking about how Homeric bright sceneries could possibly be visualised, in terms of 'texts as kinetic design.' Colour and light connect us all, over time and space. They move constantly, entailing countless gradations. Brightening or darkening the sceneries and context, bright light is also co-involved with divinity, which is unfixed and ambiguous. As a spectator viewing Homeric sceneries, I underline the significance of the poet's aesthetics of colour and evocation of light that enriches our imagination, in correspondence with the sense and recognition of his bright world, which involves awe-inspiring divinity.

研究分野：西洋古典学

キーワード：光輝き ホメロス（共）感覚 古代ギリシア 景観 多彩性 芸術的創造性 空間の輝き

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

国外では盛んに行なわれている色彩研究をさらに深め、従来顧みられることのなかった、「光」「輝き」といった表現に着目し、しかも西洋の古代関連領域では国内初の試みとして、ホメロスの叙事詩を中心に、「色」の認識に影響を及ぼす「光」「輝き」の役割を分析考察する。現代の思想にも通底する認識や感覚の深層を探求することによって、創り手の創造性と同時に受け手の感覚にも触れ、これまでにない独自の古代ギリシアの世界観を社会へ発信する。

2. 研究の目的

本研究は、当該研究代表者の先行研究である西洋古典における色彩表現の研究成果を基盤とし、「色」の認識を大きく左右する「光」と「輝き」に着目し、色彩表現との関連性および西洋古典の色彩感覚の深層に迫る。光の表象や文学的效果、社会的役割について独自の見解を提示することを目的とし、西洋古典ならびに西欧文化・思想の解釈に新たな局面を拓く契機とする。

3. 研究の方法

研究遂行のため、ホメロスを中心に、(i)作品に見られる「光」や「輝く」等々に関連する表現を抽出して分類・整理し、(ii)色彩表現との比較検証、その相互作用を分析考察し、(iii)「色」に反映される「光」「輝き」の文学的效果や表象を探るとともに現代の西欧文化・思想にも通底する色彩感覚に及ぼした影響とその文化的背景を明らかにすることによって、西洋古典における色彩感覚の堂奥に迫る。

4. 研究成果

本研究は、当該研究代表者の先行研究であった若手研究「西洋古典に見る色彩表現 「色」の象徴性と社会的役割に関する考察」をさらに発展させ、認知科学の領域の認識論や感覚の知識も組み込みながら、色彩の上に映える動きある[光]と[輝き]という要素を加え、西洋古典学の分野でも国内初の[光]と[輝き]の多彩性に焦点を当てた取り組みとして、新しい角度からこれまでにない新鮮な見地を開くことを試みたものであった。総括すると、本研究の目的であったホメロスを中心として西洋古典における光輝きあるいは光輝きに関連する表現の役割の解明に迫り、文脈において正と負の両方の働きをもつ光輝きの文学的效果、多義的な役割を持つ曖昧で不思議な神的事象との繋がりにも言及し、有用な知的貢献をすることができたと考えている。訪問先の研究機関でも充実した調査を実施し、より実証的に検証することができた。同時に、国際的連携を拡大・進展させ、今後の研究活動に結びつけることができた。本研究成果の最大の収穫は、当該研究者の学術的立場の確立とともに、立体的に原典を読み解く「texts as kinetic design」という基本理念を打ち出し、次のステップにつながる方向性を見出せたことである。国際的動向を見据えて今後の研究を発展・展開させていくための基盤を築き上げ、有意義な研究であった。

(1) 研究の主な成果

光輝きの多彩性を提唱した本研究の研究成果に至る過程を 3 つのステージ—コロナ禍前、コロナ禍、そしてコロナ禍後—に分けて以下に記す。

コロナ禍前：色彩表現と同様に「光」と「輝き」に関する表現が膨大であることを痛感した。

当該研究課題遂行の前半は、分析考察の為に文献収集・精査・整理を試み、ホメロスを中心に「光」「輝き」を表わす古代ギリシア語、特に *argos* とそれに関連する表現の分析考察に取り組んだ。

2017年夏季は英国リヴァプール大学に赴き、大学図書館・書庫で文献収集・論文執筆を行い、9月にドイツのルートヴィヒ・マクシミリアン大学ミュンヘンで開催された学会(The Other Crowd)にて、「青銅の眠り」という表現に着目し、青銅の輝く潜在性、そこから発生するイメージや表象などについて研究発表を行った。

2018年春季は、アテネのブリティッシュ・スクール(British School of Athens, 以下、BSAと略記)にて研究活動に専念。3月にスペインのマドリード大学で開催された国際学会(Gender's Fault)にて研究発表、色彩からみるジェンダーの考察を試みた。また、アテネの西洋古典学研究所(The Institute of Historical Research / The National Hellenic Research Foundation)で講演する機会を与えられ、現地で活躍する研究者からのフィードバックと共に、今後の研究の展望や方向性について非常に有意義な情報やアドバイスを得ることができた。同年6月文芸学研究会(於大阪大学)にて、*marmareos* に焦点をあて、その表象や『イリアス』における役割について研究発表を行い、内容をまとめた論文「*Μαρμάρεος*; 『イリアス』の中の輝く世界の一面を探る」が『文芸学研究』23号に掲載された。

2019年夏季は、英国の大学図書館にて論文執筆と研究発表の準備、9月にスイスのベルン大学で開催された国際学会(European Association of Archaeologists)のFurnished Interiors in

the Ancient Mediterranean and Egypt というセッションで研究発表。歴史上特異な経緯を持つ purple (紫) の上に映える輝きと動き、その言葉の奥底にある真相、その輝きを観る者の感覚との関連性という新たな視点に重点を置き、今後の研究の方向性を示唆する有意義な講評を得ることができた。このセッションの研究者同士の共著で研究書が刊行予定 (Brepols: Belgium)。

コロナ禍：準備万端であった外国人研究者招聘講演会は 2020 年 4 月を予定していたが直前に中止。スケジュール調整も不明のまま頓挫した。未曾有の事態、一時研究はほぼ凍結状態であった。

2020 年春季のギリシアへの出張は残念ながら予定を変更して急遽帰国した。全てオンラインに変更となり、9 月にドイツのキール大学で開催予定であった国際学会 (European Association of Archaeologists) での研究発表もオンラインで行った。Touching Objects, Feeling Materials というセッションで、新たに *sigaloeis* という「輝く」を意味するギリシア語の考察に取り組んだ。

時間をつくり研究に取り組んだが、さまざまな制約のもとでめざましい成果が得られないなか、研究の延長を決断した。

コロナ禍収束の兆し～最終年度：巻き返す高波の期間

出版社の方々のおかげで、コロナ禍の間も執筆を続け、『ホメロスと色彩』(京都大学出版会 2022 年) を出版できた。課題も山積するが、多くを学ぶことができた。

2021 年春季の間に提出した要旨 (人間の相互理解の重要な一要素としての光や色彩をホメロスから分析考察する試み) が受理され、2022 年 8 月にキプロス大学で開催された学会 (The Art of Reconciliation in Classical Antiquity) で研究発表。3 年ぶりの対面での学会参加となり、国際的に著名な研究者と知見を交わす機会もあり、非常に有意義であった。「和解とは」という感情論から倫理・道徳観にかかわる議論に参加したことで、研究の方向性に広がり加わり、新しい着眼点の開知ともなった。学会論文集が研究書として刊行予定 (Mohr Siebeck: Germany)。

光には二面性があると言及した論文を執筆し、『芸芸学研究』第 26 号に投稿し掲載されたことは、ギリシア文学研究の存在を示すうえで有為であったと考える。

巻き返しを図る最終年度 2023 年 10 月、*aiolos* を中心とした分析の成果を、要旨が受理された国際学会 (The ACE & CREATIVITY Conference, Liverpool) にて研究発表 (10 月オンライン)。

「緑の蜂蜜」という表現に焦点をあてた論文が『フィロカリヤ』41 号に掲載された (“The Flowing Colour of Religious *Méλι* and its Transformed Metaphorical Function in Homer”)。 *chloros* (緑か黄緑か深緑か?) と蜂蜜を意味する *meli* の関連性を追求したところ、新鮮な、瑞々しさを意味する *chloros* にも輝きの意味が実は内在することもわかり、宗教的な儀式に使用された *meli* とともに、神聖な事象との繋がり可能性を提示した。

2020 年から頓挫していた外国人研究者招聘講演会(「キクラデス諸島の輝き」Dr. E. Angliker, BSA) を、先方の講演者がフライト前日にコロナ感染でさらに延期というアクシデントにも見舞われたが、2024 年 1 月に実施した。

なお、次年度になるが、最終年度の間グラーツ(オーストリア)の国際学会 War in the Ancient World International Conference, the Institute of Classics in Graz (2024 年 6 月) に招待され、研究発表の予定 (タイトル; ‘The Other War: The Transformed Phases of Femininity through Viewing Colour, Brightness, and Gender in Homer’)。また、ローマでの国際学会 EAA Annual Conference, Sapienza University of Rome (2024 年 8 月) に提出した要旨が受理され、Sacred Landscapes in Context: Creation, Development, and Conceptualisation というセッションで、オリュンポスの輝く景観について研究発表(タイトル; ‘Sensing Illuminated Olympos over Time and Space, along with its Transformed Religious Aspects in Homer’) が確定している。

(2) 国内外における位置づけとインパクト

本研究課題の成果のインパクトとしては、以下の二つを挙げることができる。

「色彩」や「輝き」等は区別できないシームレスな事象である

西洋古典学を専門としながらも、色彩表現を継続するなかで、赤と言っても数えきれないほどの赤があるにも関わらず、「赤は○」や「赤と○の組み合わせは…」等と定義づけ、規定化、基準化する方向全体に反対する本研究代表者の見解を提示することにより、区別することへの問いを投げかけた。各論文でも提唱したが、特に単著『ホメロスと色彩』では、色彩は実はもっと奥が深いものであり、「赤」は「赤」と一つに定義できない個々のカラーの重要性について社会にメッセージを伝えたことは国内外における従来の考え方に一石を投じるものとして評価できる。また、原典を読み解くさいに「動き」も加え、‘texts as kinetic design’ という一定の見解を提示したことも、国内外の学術的関心を引き寄せることに結びついたと考える。

国際的連携の進展・強化

コロナ禍を除き、海外に出向いて研究発表や資料調査、セミナーに積極的に参加したことにより、欧米の研究者の助言を受けることができた。また、次の研究課題の遂行につながる意見交換によって、招聘する外国人研究者、海外研究の協力者の見通しを立て、次回ホメロスに関連する地域の考古学調査への参加等も見据えている。今後期待される研究活動について話を進めることが

でき、長い目で考えても、将来的に国際的にサポートしあえる強い繋がりを構築したと考える。その一例として、ほぼ中止を見込んでいたが、最終年度に外国人研究者招聘講演会を開催できた。また、国際学会に参加・発表したことによって、国際誌への論文掲載、学会論文集の刊行に向けた活動も増えた (e.g., forthcoming - “Porphureos: Aspects of the Transformative Role of Bright Colour-Hues in Interior Space in Homer” (Brepols); “Presenting the Development of Reconciliation in *Iliad* 24 through Sight and Touch” (Mohr Siebeck), etc.)。色彩や光輝きの視点から劇場のようにホメロスの作品を捉え、「動き」を考慮に入れつつ読み解く分析考察は欧米でも少ない。国外の研究者にも異色のインパクトは伝わり、欧米の学术界においても本研究はある一定の立場を確立しつつあると判断する。

(3) 予期していなかった事象が起きたことにより得られた新たな知見

ほぼ順調であった研究遂行を大きく妨げた事象は(i)コロナ禍と(ii)当該科研費前窓口機関の「制度の見直し」にかかる一連の諸事の2つである。当初の予定を大きく覆した想定外のコロナ禍で、研究遂行は一時ほぼ凍結状態であったが、なんとか合間を縫って時間を作り、オンラインでの研究発表や論文執筆、そして単著完成に漕ぎ着けたことは、研究全体の意味や現代社会を多角的な視点から見つめ直すことでもあった。

当該科研費前受入機関による策定のもと、科研費への申請不可の直前通知、残る予算を延長して使うよう事務方に指導され、最終年度前半は予算も執行されず延長した期間は研究の停滞を余儀なくされた。当該科研費移管の際の不可解な対応の後、移管先の大阪大学の誠実な教職員の誠意ある職務執行のおかげで、最終年度後半は過去数年分以上に生産的であった。研究者の研究費は研究者による研究計画に基づき研究者が使用する経費であるという常識を認識し、研究者の「知」を基盤に社会に対するメッセージを発信する真っ当な大学の在り方について、西洋古典から現代社会につながる倫理・道徳観を再認識した。色彩の上に映える光・輝きへと進展させた今回の研究遂行の過程においては、想定外の諸事に遭遇し、認知科学の領域にも深く関心を広げるきっかけとなった。大きな成果の一つとして、古今東西不変の「感覚」や「認識」の存在という知の再発見がある。これらも重要なキーワードとして念頭に置き、今後の研究遂行にあたり、他者に迷惑をかけてはいけない、嘘をついてはいけない、社会では自分が中心ではない、個々の輝くカラー(個性)があるという倫理・道徳観に対する認識を主張する傍ら、強者が弱者に対してほぼ脅しに等しい標準化を強要する傾向に警鐘を打ち鳴らしていきたいと考える。「学長に伝わっていた件だから」を理由とした当該科研費前窓口機関の一連の職務執行に起因する甚大な悪影響については当該研究代表者だけではないため、第三者による調査が徹底的に行なわれてよい案件であると考えられる。

(4) 今後の展望

本研究は、従来体系的に考察されることのなかった当該分野の研究に新たな視座を提供し、色彩の上に映える光や輝きに関連する表現が及ぼす文学的效果や社会的役割など新たな見解を提示する可能性を大いに孕んでいる。

国際学会や国際誌に投稿し要旨は受理されるようになったが、当然のことながら、却下されたり刊行に至っていない論文もある。今後も果敢に国際誌への論文掲載等、挑戦したい。国内では入手困難、且つネット上でももう手に入らないような古い文献などを閲覧するのに予想以上に時間がかかる。限られた時間を最大限に活用すべく効率的に動いたつもりであるが、精査すべき文献はまだ多い。例えば、未だに議論の続く、「輝く」や「銀色の」又は「速い」をも意味する *argos* については、光と輝きが内包する 正 と 負 というイメージやその多彩性をさらに掘り下げて考察を進める必要があり課題として残る。また「色」とは「覆うこと」という一つの語源を起点として、肌身を覆う・隠す、つまり色や光は隠して騙すことに繋がるという視点とジェンダーとの連関性への着眼は、今後の考察の方向性に有為な視座となろう。

光・輝きに関連する用語が複合語も含め膨大にあり、他の関連用語の分析考察が必須であるが、物語の中で、「輝く」に関連する色彩表現が、「動き」や「音」とうまく組みあわさって使用され、オーケストラのように総合的な調和をそれぞれの場面描写に生み出している。それは、光輝きを認識しながら、景観の中に巧みに明暗を配置した詩人の采配であり、西洋古典文学に通底する表現手法であるという当該研究課題代表者の仮説をさらに確固たるものにすべく、他の用語との比較検証が必要となる。これらの成果を、光や輝きに着目しながらも、音や動きとの連関性をさらに詳らかにする為のステップとして位置づけ、今後の研究へと進展させたい。多彩に輝く光と陰影とのシームレスな連関性も重要事項として捉え、修飾している対象の「動き」にも着目しつつ、「輝いている」ということについて文学的視点を投げかけることは人文学全体の復興にもつながる。「輝き/光」には一般的に明るいイメージがあるが、実は神的なものの背後にある光輝き、畏れ多いその明暗の二重性をも包含する、その多様な多重性について 独自の見解を示すべく、最終年度内にまとめきれなかった用語(*aglaos*, *auge* 等)も組み入れて、現在鋭意執筆中であり、総括したものを世に出すことも今後の展望の一つである。感情論や認識論などをはじめとして多岐にわたる学術的関心を惹きつけることになり、現代社会の多くの分野での応用の可能性が想定され、本研究の展望は無敵大である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 Yukiko Saito	4. 巻 41
2. 論文標題 The Flowing Colour of Religious Meli and its Transformed Metaphorical Function in Homer	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 フィロカリア	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko Saito	4. 巻 -
2. 論文標題 Viewing Gleaming, Rapidly-Moving Scenery with Aiolos: Brilliance and Motion Reflected within Transformed Religious Aspects in Homer	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 New Classicists	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko Saito	4. 巻 -
2. 論文標題 Sensing Colourful Brightness and Emotion: Sigaloeis and its Transformed, Metaphorical Dual Function in Homeric Poetry	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Archivi delle emozioni	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西塔由貴子	4. 巻 26
2. 論文標題 ホメロスによる sigaloeis の采配 「輝いている」ことの捉え方に関する一考	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文芸学研究	6. 最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 西塔由貴子	4. 巻 23
2. 論文標題 Marmareos; 『イリアス』の中の輝く世界の一局面を探る	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『文芸学研究』	6. 最初と最後の頁 68-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yukiko Saito	4. 巻 4
2. 論文標題 Cheating Colour: Brightness Transformed into Representation of Female Characteristics in the Iliad	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Electra; Centre for the Study of Myth and Religion in Greek and Roman Antiquity, founded by the Patras University Department of Philology (Greece)	6. 最初と最後の頁 123-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.26220/ele.2935	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yukiko Saito	4. 巻 56 (4)
2. 論文標題 Brightness and Movement of Argos in Homer's Iliad	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Acta Antiqua Academiae Scientiarum Hungaricae (Hungary)	6. 最初と最後の頁 399 - 419
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1556/068.2016.56.4.1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Yukiko Saito	4. 巻 4. 1
2. 論文標題 Some Remarks on Brightness in Homer's Iliad	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 HARTS & Minds: The Journal of Humanities and Art, 4.1: Chromatography Special Issue	6. 最初と最後の頁 81-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計11件(うち招待講演 3件/うち国際学会 9件)

1. 発表者名 Yukiko Saito
2. 発表標題 Viewing Gleaming, Rapidly-Mobile Scenery with Aiolos: Brilliance and Motion Reflected within its Transformed Religious Aspects in Homer
3. 学会等名 The ACE & CREATIVITY Conference Zoom, The Department of Archaeology, Classics and Egyptology, University of Liverpool, UK (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Yukiko Saito
2. 発表標題 The Other War: The Transformed Phases of Femininity through Viewing Colour, Brightness, and Gender in Homer
3. 学会等名 War in the Ancient World International Conference, the Institute of Classics in Graz, June 2024, (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Yukiko Saito
2. 発表標題 Sensing Illuminated Olympos over Time and Space, along with its Transformed Religious Aspects in Homer
3. 学会等名 European Association of Archaeologists Annual Conference, Sapienza University of Rome, August 2024 (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Yukiko Saito
2. 発表標題 Presenting the Development of Reconciliation in Iliad 24 through Sight and Touch
3. 学会等名 International Conference: The Art of Reconciliation in Classical Antiquity, University of Cyprus, Greece (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yukiko SAITO
2. 発表標題 Brightness - Sigaloeis - Sensed and its Transformed Metaphorical Function within Homeric Poetry
3. 学会等名 European Association of Archaeologists Annual Conference: 'Touching Objects, Feeling Materials', University of Kiel, Germany (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Yukiko SAITO
2. 発表標題 Bright Blue Sea in Homer <Poster>
3. 学会等名 The Colour Blue in Ancient Egypt and Sudan, Centre for Textile Research, University of Copenhagen, Denmark (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yukiko SAITO
2. 発表標題 Porphyreus: Aspects of the Transformative Role of Bright Colour-Hues in Interior Space in Homer
3. 学会等名 European Association of Archaeologists Annual Conference, University of Bern, Switzerland (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 西塔由貴子
2. 発表標題 Marmareos - 『イリアス』の中の輝く世界の一局面を探る
3. 学会等名 第63回文芸学研究発表会 (於 大阪大学) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukiko Saito
2. 発表標題 Seeing 'Colour' in Homer's Iliad
3. 学会等名 The National Hellenic Research Foundation / Section of Greek and Roman Antiquity, Athens, Greece) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukiko Saito
2. 発表標題 Colour and Gender: Bright Hues Transformed into the Representation of Females in the Iliad
3. 学会等名 GENDER'S FAULT: IDENTITIES, TRANSGRESSIONS AND INTERCONNECTIONS IN THE ANCIENT WORLD, Universidad Autonoma de Madrid, Spain (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yukiko Saito
2. 発表標題 Characterisation and Colour within the Representation of Sleep in the Iliad
3. 学会等名 That Other Crowd: Nethergods in the Ancient Greek Mythical Imagination, Ludwig-Maximilians-Universitat Munich, Germany (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 西塔 由貴子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 京都大学学術出版会	5. 総ページ数 288
3. 書名 ホメロスと色彩	

1. 著者名 Y. Saito, "Porphureos: Aspects of the Transformative Role of Bright Colour-Hues in Interior Space in Homer"	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Brepols Publishers, Belgium	5. 総ページ数 -
3. 書名 A provisional title - Furnished Interiors in the Ancient Mediterranean and Egypt, D. Andrianou (ed.)	

1. 著者名 Y. Saito, "Presenting the Development of Reconciliation in Iliad 24 through Sight and Touch"	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Mohr Siebeck, Germany	5. 総ページ数 -
3. 書名 A provisional title - The Art of Reconciliation in Classical Antiquity, G. Evangelou, A. Shilo, and S. Tzounakas (eds.)	

1. 著者名 Y. Saito, "Viewing the Sparkling Scenery of the Sea with Marmareos" (pp. 37-71).	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Universita degli Studi di Milano: Dipartimento di Studi letterari, filologici e linguistici, Italy	5. 総ページ数 324
3. 書名 Epica Marina I, 2, A. Andreani, O. Ghidini, and B. T. Imbri (eds.)	

1. 著者名 Yukiko Saito, "A Fast-flash Shining Aspect of Homeric Colour Expressions" (pp. 101-137).	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Edizioni Saecula, Italy	5. 総ページ数 456
3. 書名 Ricerche a Confronto 2015. Dialoghi di Antichita; Classiche e del Vicino Oriente, S. Ranieri and A. Roncaglia (eds.)	

1. 著者名 Yukiko Saito, "Colour in Motion: A Comparative Study of Some Brightly Shining Aspects of Sea-Glow" (pp. 263-280)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Archivo de la Frontera (del CEDCS)	5. 総ページ数 321
3. 書名 Congreso Internacional: La cultura desde una perspectiva multidisciplinar = International Conference: Culture from a multidisciplinary approach: Alcala de Henares 16, 17 y 18, marzo, March, 2017, P. M. Testa and C. S. San Segundo (eds.)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 特別講演会 キクラデス諸島の輝き	開催年 2024年～2024年
----------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------